

木原武一著「大人のための偉人伝」新潮選書、新潮社 1989年7月20日刊を読む

天才の学び方(17) 二宮尊徳 (1787～1856)

○「積小為大」：小さなことを積み重ねて大を為す以外は、没落した我が家を再建する方法はない

○数字への異常とも思われるほどの執着

小さな数を合わせることによって、やがては途方もなく大きな数字が生まれる

○「廻村」：朝早くから日の沈むまでほとんど毎日のように村をまわり、一軒ずつ訪ねては田畑の状態、家人の働きぶりや生活、食糧の貯えなどをつぶさに調べた

桜町領(現在の栃木県真岡市二宮町)は全部で 150 軒ほどであったから 1 日に数軒もまわれば、ほぼひと月に一度はどの家も訪ねることができた

○表彰制度：「出精の者(働き者)」を農民同士の投票によって選出させ、選ばれた者に鍬や鎌などのほうびを与えた

○五常講：(1)①無利子、②分割返済、③冥加金の支払い

(2)5つの徳目、「仁・義・礼・智・信」を守る誓い

①「仁」：余財のある人が困窮者に貸し付ける

②「義」：正しく返済する

③「礼」：返済後、恩義に謝すべく冥加金を差し出す

④「智」：余財をいかにして生み、また、いかにして借財を迅速確実に返済するかを工夫、努力する

⑤「信」：約束を守る

○ただひたすら運用可能な報徳金が増えるのを喜びとした。たえずその大部分はだれかが使っていた

○気負った心を去り、肩の力を抜け

○世の人はだれも聖人は「無欲」と思っているが、そうではない。実は「大欲」であって、いちばん欲が深い。賢人はこれに次ぎ、君子がその次で、凡夫のごときはもっとも「小欲」である

・学問とは、この「小欲」を「大欲」に導く術である

「大欲」とは何かと云えば、万民の衣食住を充足させ、人身に大福を集めることを欲することである

